

今西幸蔵先生のご退職にあたって

立田 慶裕

2018年3月に、今西幸蔵先生のご退職されることとなった。1990年代の前半に、先生が大阪府教育委員会で社会教育主事として働いておられた頃、大阪府立文化情報センターの主任専門員として勤務されていた。小生は、大阪大学の学生を連れて同センターを訪問し、先生に文化情報センターの役割とその意義についての講義をお願いした事がある。そのことがご縁となり、以後今日にいたるまで、研究者としての仕事をご一緒させていただいてきた。

今西先生は、1998年まで堺市の中学教員、大阪府の高校教員や教頭としてご勤務されていたが、同年に京都文化短期大学に大学教員としての勤務を開始された。すでに学校教員時代から生涯学習や社会教育の研究へのご関心があったが、大学教員になられてからは、さらに研究活動が活発化していった。

小生自身も、国立教育政策研究所（旧国立教育研究所）に1993年より勤務し、2014年に退職するまで生涯学習の研究についての多くの研究テーマを手がけてきた。その多くの研究テーマに、先生にはご協力いただいていた。健康教育、防災教育、読書教育、学習需要などの研究所のプロジェクトに参加していただいただけではなく、『知識の創造・普及・活用—学習社会のナレッジ・マネジメント—』（2012年、明石書店）、『キー・コンピテンシー—国際標準の学力をめざして—』（2006年、明石書店）といった重要な学術書の翻訳にも参加していただいた。また、生涯にわたる音楽文化の創造のために、生涯学習音楽指導員の研修にも専門家としてご協力いただき、現在もその教育活動を継続しておられる。

今西先生の研究テーマは、生涯学習一般というよりも、むしろ先生ご自身のキャリアとなっていた学校教員と社会教育主事が抱える問題をいかに学術的に解決していくかということにあったと勝手に解釈している。そのことは、先生のご論文「社会教育行政の新たな課題—学力と評価の視点から」（天理大学生涯教育研究（11）、pp.9-24、2007）で、社会教育行政の課題として次の4点をあげておられることに示されているように考える。

その4点とは、(1) 社会教育としての学力観の形成と評価の実施、(2) 公教育に関わる社会的担保の確保、(3) 地域コミュニティ形成における社会教育の明確化、(4) 社会教育と学校教育の協働化、である。

この2018年に刊行された先生のご著書、『協働型社会と地域生涯学習支援』は、これまでの学校教育と社会教育、そしてより広い観点の生涯学習支援という視点からまとめられている。

先生は、別に『21世紀の宝：生涯学習』というご本を刊行されているが、今世紀が生涯学習の時代でありながら、いまなお、学校教育や社会教育といった行政の縄張り感覚で動く人がいることに大きな憤りを持っておられる。そこには、学者の立場というより、学習者

の立場に立って、優れた人権意識に基づく市民のための学習の場、協働型の社会の実現を望まれているご姿勢をみることができる。

小生が研究所を退職後、神戸学院大学に勤務するようになってからは、教職課程についての仕事を大変多く教えていただいた。時に今後の方向性についての意見の食い違いもあり、先生とは口論することさえあった。今に思えば大変無礼な振る舞いかと反省しているが、私が以前勤務していた東海大学では同僚の先生方と学問を巡って多くの口論をしたにも関わらず、そうした口論をした先生方との思い出は深く残っている。その意味では、本当は、今西先生と、教育について、生涯学習についてもっと多くの議論を交わしたかった。

かつて、関西大学の赤尾教授と今西先生と小生の3人で、琵琶湖のほとりで1泊の研究合宿をしたことがあった。その時、関西大学の先生が教育をめぐる関西の行政論議に入り、その方と今西先生は徹夜で議論をされたが、今西先生の関西教育行政に関わる知識がその方へ披露されるばかりで、小生の入る余地はなかった。残念な一時であった。

大学の教職課程については、学生の学力向上という大きな課題が残されており、その点については今後も努力していきたい。教職課程の充実と発展こそが、今西先生のご希望であったし、小生の義務と考えている。

先生のご母堂は小説家を目指しておられ、先生ご自身も文学への志望を持ちながら、歴史への関心を強く持っておられた。いつも歴史年表を携帯され、優れた記憶力に驚かされたことも多い。大学教員としての地域へのご貢献はあまりに数多い。それだけに多くの人や地域社会への貢献をされているということ自体が先生の人柄を表しているといっているのではないだろうか。小生は、そうした先生の恩恵に与った1人として、今後も社会に役立つことを少しでも心がけていきたい。